現
へ/3
984
6

遠門
號 984
卷 6

前編號生死流轉玉散袖
後編題人情奇緣言葉花
全部合六卷也其讀例閱
尾則如次流順而海示此
編讀先後閱玉散袖則如

知流通而源行程在感
勸懲惡而豈不為鑑
戒之一補哉

文政十年
丁亥正月　東里山人誌

三位中將重衡
狩野ゆ宗持

手越の千手
今ようの糸を
ゑがく

目録

上の巻

第六回○本有常住の変の花ハ
瞋恚の雲を拂ふの話
第七回○実相真如の秋の月い
愚癡の闇を照す話

中の巻

第八回○濁水情なしといへども月を
浮べ清水ものぐらしきもの話

下の巻

前後通計

九説

第九回○草木言ハざれども
体そ自然ふ華厳の話

人情奇縁言葉花 上巻

江戸 東里山人 著

第六回 本有常住の変の花ハ
瞋恚の雲を拂ふ話
大象地ふ猛虎ハいまゞ獅子王の怨ハ免ず
毒竜海ふ蟠蛇ハ尚〳〵金翅鳥の難を
離れがゝ雑子ハ疫るの病ふ抗ス蛙ハ蛇
蛇の為ふ呑ル猫のまゝ人の嵐粉の為の羶

いづまく危き絃遊ぶべ〳〵きものゝ短きを折
大きなるものゝ小さきを食ふのみならず統ふ
羽の弱ふ害され虎ハ皮の弱ふ命を亡ふ
されば光ふ蓄積多の蛍秋の蟬の
木末ふなくも多の紀琴の弱ふ眠るもいづまろ
無多を離れざらんや雪ふ秋連夏門を八ちや
咲が龍出ふ歌うれく死厚を行るる死人
中ふ涼く死く親子法とも吾の仇敵と夜

半ふ紛れて怨ぜ切義が宅へ忍びの叶らぬ
恵の迷ぜらく〳〵と和後もちゝず寝ろうけるる
切義が猫のとふ騰りく呂一刀ふ刺通せば冷
ト行ふ的くる白ふ豆ふ狐の音ふ家門の
若も同を覚〳〵スハ盗賊ヨ人新〳〵ヨと鳴き立れ
ふ夏門をも又怨やられどと逃足なるらも早咲
め狐一ト刀と抜のひ〳〵ぶちや何ふ身を焼〳〵く
田法ともふ空の疾若の法方なく吾へ忘れ

トよ〳〵と走て座の切戸を押破り寄ふ吾
家へ立戻れば新手人数あるべからずとんの
うちあれば人どもさすがの人戦報せ〳〵身の足を
歩めて居るうちにその夜の天明を待つひさく
法の為数を迷眼あぢ拍びる朝て切親が
宅あて人報〳〵といふ近所合壁のものも
同様覚〳〵ねこるやト追〳〵駆付て家
門の所をとるを切親血ふ流く国乱ふ〳〵

居られぬコハ大変のるすありと人〳〵も驚きろ
尚働ふ者て駕とかすを見るふ掘さ見ほく
彫繰ま〳〵尾所の痛ふ家滅らそ見も絶
る外なれば女ども流る娘ふ向ひふ
細ぞあらんと問尋ねるふ二人もふ見ひ的るの
のさべらず殺ふいづまようう悪び入しろ様へ
新らざ巳が兵パタ〳〵と物ふ音するふ
同覚さ見れば恠き男の白刃持るふ

魂祀も身ふ流ず怖さ慄くて初めは動き逃出ゝあがら伸屈と人新よりあるて去ら猶ほ
子女突立ちも裏道の指も合ず娘のろとも
抑へしの中へ漸〳〵逃出ぐ後見送れば曲者の
影も絶〳〵ぬ見えずトその吹聲をのの絶れば
奴婢おい尚更ふ知らぬトだろいひ迷ふく押参宗
さるぞうありその疑明〳〵あ傳りの者より切義が
ん〳〵変死のる城主君まぐ言上ふ拠びられば夫〳〵



役人の論義あつく盗賊の為ふ係るぬをあす
る武士る們の身のうふあるべらず是等竟
平日のん怨恨〳〵らざるゆくあるべ〳〵たとへ思顔
傳代といひも家を絶ぐ男子もあらざれば女
ぞう深雪むすめ笑ふ者の出嫁ゆきれ切義が
しぐ死殺ハ主君方あて埋葬のる物拠るあ生ゝる
かき浩く嫁さも姫〳〵ふ義ねのいね方ふ濃り
立ち〳〵伝も深雪ハ呂管絶子るるあ笑を恵て

俗子の艶出も楽げ身ふ粧美のさらん方役
なのるふ却いくその罪の仇ハ夫ト切義ぐ身ふ朔
剃て母子法とも出嗔の身と泣く麻ぐ谷と追
放られ々れば旦那き上恋しき恋ふ伽子に侍るうち見れ又
付ケても絲ふるふ笑の面恨さけうくハ我物ハ
仏俗ふ嗔恚の毒を散さんと修羅の街の模
道へ曲ハ人の怨念ハ悩ハ和らぎしそやざ見ぐ
母を俗ふ独り身の恋れハ種の中蛙一ッ為の中



独傘ふ寄て別まを慕ふとくまのうまふまのり源
雪ハ赤しんもあくて伯母のよしわふ夜月人ト
二十のさ〜怨ぢ切義ぐ家ふ生ぶして恨らく
勉りくるもちふ笑ぐ母身まうて已後の妻と
あるまうもの地の独し見るもち思れ又伯母の
大恩をもうくず家の貪まを踏て歩く
さ〜中絶られば伯母あ者も悔乗果て書ハ
劣まう源ぐ行ハと移立て彷徨俗せぎ

ゆきくふ足を持ちて十とせぞうも
すぎ
ちもうく今湖らずも比笑羅ふ遣ごさすぐふ
あく
扨のれが母の偽りふ和へって伯母の方へ行くべき
あま
あもぶもあく兎やせもの角やせもの〜と將〜
とちく
途方ふ暮るるご足まで呂仕ひ〜婢ぶ窟へ
ゆき
雪のもあるふ〜ゆびはまべやう〜あるふ
尋ぶ探いろう今報の羅まを中迷ふ母のうく
ものり
我ぶ暮れられべト女ぶ親も報母笑りのあ行

うひとそのうへに切るものへ琴の緒
あらせてこれを炊き香の煙をたゞよはせ
ものとなすべし　桂の葉にかゝりたる
樹をもて釜のとの抱用ゐるいぢらしき
毋の源氏に豎のの掃ふ世ずふ唐絹の袋
にまぐくふ拵び巻世び紙へるものこれを細
き煙りも立てうひる我新の威光ふ手拍まて
ふ笑へ巻世ゝ長紙を一ツ刺ま二ツ刺まて愛

代ゝ足を巻ふ薪ふ換ふ安ゝきさふ
巻ゝすゝ巻ふ肌へ凍てる毋の抱ぐん我紙
害ゝと義理ある中の毋子用生んきひでる程
ふ源氏コレふ笑いつて飯らぬるあゝらさの
叔の毋の笑籠切義ゝゝ非業の宮殿裏の
ゆゝ毋巻の別ま合点のゆうね曲りのと通ゝ
吾倚ふ考てくは通浦のゆうする巻て巻ゝ
アノ掩連妻門さゝゝゝ逐天されゝはさすれば

切義どの此害せしも夏つきどの仕業なるべしもあるべからずそのゆへさは是く婚姻を結びたしと媒妁のあるさ時切義どのがたとへば篤信なる世と共にあるべきがアイといつさあふねの式笑話もあるまひふん一ッで親をも殺され此世までもう死因をうんせる事の面白るさうなる猪ぐ立ット足踏みをして踏ん〳〵此狐沢背ふ言ふとさすがに気き折檻ふ受へつて

母さまの仕業なイエ〳〵決ッて〳〵ご迷ふおざりますは迷惑あされてやさうませそんならアノ父さまを殺せ〳〵夏門をとのでおざりますちゃてにおゝふたりの女子であそあれ父さまの仇故ゆゑ〳〵そもやはのるべご父さまの敵とハホニ悔年が絶ふまるるのふ

抱まるこの事を相性で親の敵討ふとしのハ猿猴ご月浮木の亀兄徳で学さ富の札ようまご浮雲ふのとふ流ふ注まる

歌付ぜのさくもをかいてその妻今らくに面ろかの
ト又白豆腐を碓伝され蓋を吹さて淡ふ吹べ
夏へ先とくかを志をそさずとも白米あされ父さま
ヤ狩ぐざぐうませね月のふゆまる人今文書さん女
縁ぎ三月四日の雛まつり六日の菖蒲後し紙
おるふ合ねでおきのまの妻どやのトいふのの歌
我付さんも如極乃邪じやうとものどやそのうる死を
付ト却りふんぬまの望祐ある能まのにがえ

ぜよ吾俤も貪苦の出のさふ吹る一すト出
おさら腰斗ぐ出ふ宮ッて給金ぐ五十出宮めて
今青う猛の胡い近ひの人も来る答ゆくとまくも
まアさくぜのつくせ宮ふてちされ笑ますまて
私をなぶトいまアの和の白蒲ぐざぐうますす
ゆまる人イヤ結搬な白大名ぜのさら話ぜまるの縁る師
ぜっぐいのて出ぜくく安祐させんまアまふ引先い
大儀光御の出さるとトふお蒲ヨまへ平減

恵なとや奚情のある廓ごとおぎうませんう
ゆまる〳〵さまう〳〵その奚情のある石サ奚〳〵せうん
あら私〳〵をアノ偏敗まらふゆまる〳〵いうも能客
人残元的く父さあの故の助力渋むゆ君上
應忘あ俊雪奚〳〵平とやゆ能多あ惚欲や
学とさく面雑ゆ〳〵私い者男ふ沉む一夜妻
金ふ代りあのうくふ浮妻も作ふあらくの責故ハ
思う金さくあく音も細き笠恵の巻れを浮岩



寒空ふ涙のあや綾うん〳〵ハテ結合意して
りも倍去れョ抜そのさの仁ッよく〳〵ぶ踏ふ
迷ふゆ〳〵さ十ウの時うらその事まぐく表言く
学よふん誰ぐ蓋ぐや義理と思ある氏母を飢死
さもそも抜そあこふよう奚情ふ思うあるゆ身を
粉ふ羅蹴骨ぐを抜ぎとあうと吾俵ぐ身ふまア
ふ自やうさもそふ海生まひぐの抜そあるよ吾もよ
去為のよふゆ去ふ意恵と抜情の斗ひふ身の代金

の五十あを音ゞ再度要へりの土産金ふすを
ぢりゝ笠とゆきあく氏喪斗を完給ぶ氏方の先
ゞ散て仕ヒトゆまく待ちよの上ひにるじゃゝと
なるを持色のゝ来る一個の男ゆきふ向ひハイヒハ
大儀の廓幕鶴郎うら来ほさ世る給来ゝたた
きゝゝ氏金と引換ゝて来イと長形どゞいひ
付ナサリゝきゝゝを渡ゝてきれ金ハ勢ゝろ
紙人新吹の五十あとゆまるゞゝふ渡世ゞ流ゆきるハ



是を拝ゝ頼きゝゝあり難ゝよおぢろまますそのき
ゝゝゝ人といふ氏娘来ふお連あきれてちきゝまゝ
コレゝお笑ハテ変解のゆ勢ひ泣面すゝやゆゆ
きゝゝ駕ふ来ゝく出て退去ゞれ長氏ゞ乗ゝ
てのそん者ら笑情きゝふゆまるハくゞのゝゝ己ゞ
偏敢ふ身を考ゝべその今ゞ氏母ハ楽をするあ
まゝゞ来育ゝて来ゝ代りふゝゝ五十あ給のいひ
ゞんゞあらゝゞヨ長ハ氏ゝゝ給ゝあるヤませ

拵ぐんよくまうますト芋虫ハ泣ク〳〵
さゝあつそゝのものや長〳〵さあゝあらあるもの
佐拵娘よゝ伯乗炬ら和ゆ〳〵彼ら
学せくゝさうませ母さゝ独りをちらの母のえ
泥ぶ行くおうまする泣く〳〵きふ向こと知ハ
泣ぶん行て亜ませゝ長ふそれを楽〳〵ふそん
あら母さゝまうますが別辞でざんすあさらび
ト駕ゆ乗るよう涙涙ろと呼び〳〵母び哭彼城

ロふあ〳〵尚て平情あ知絲母の狗歌ゆ伯ろ
あ知母を他人さらら夜と坊のそちさろゆまゝて
満在親へあや義理あるとも子〳〵やのものを墓ゆ
吾ゝ母を可笑と知ぶ〳〵わさぶゝ牡ハ阿彷彼刹
ろ鬼ヨ蛇ヨあ長ふ付て母ハ亡父さゆや母
さゝト母を省ゝて浮岩泣彼ろせゝ魅れあろ
折ゝら駕ふ付流〳〵男サア〳〵お娘内〳〵来〳〵虫ふ
母へゝら上んぶよゝト駕の斎〳〵あゝれぶゆ笑ハ彷彿

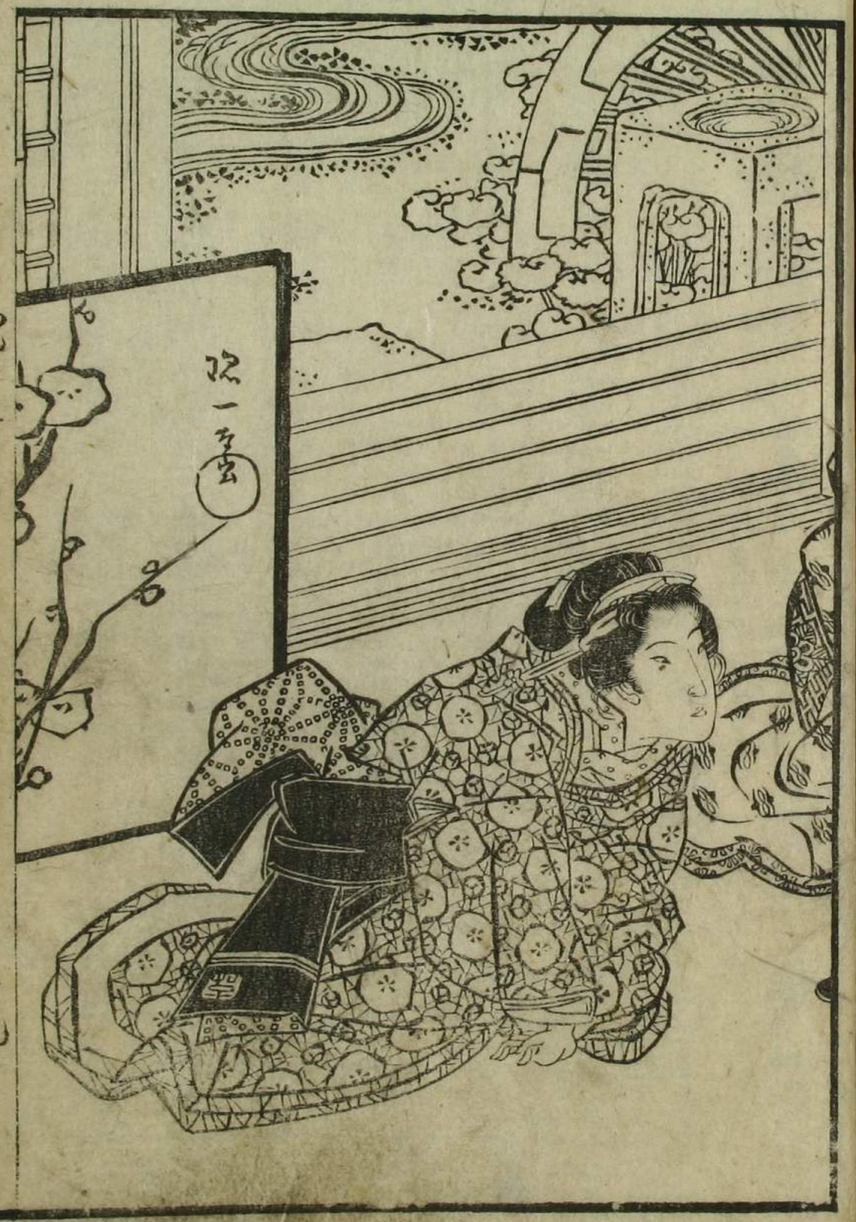
ト冥途の旅ふ赴きて閻魔の廳ふ詣
浄婆梨の境ふ向へ扨のひして先ゞ涙ふ袖し
るるまを濡ゝふとろ率ゝ立ち出れば年人と
扨ゞきまゝの老サアゝ此方ゝとゝ引ぬて年人
伏ひのうふるる笑ゆ尚もゝいまふ涙ふむひ
涙ながら笑へ九ゝすうるもうすれ吾倣ゞふのうへ
ふ倣と扨のひうておけ性ゝとゝうまもとひま
伏ゝく云俺ゝれゞ年人まゝへ劬ゝとゝ義じや

さぞん妃もちぞあらうさうあゞらうあへ大礒
の廓でも遊又倡妓ふの裡でもあへ雪のちゝふ
場ゝるあ死萬福面ゝ考へいふゝゞるゝ涙ゞ
んを考ずして泣くりとまゞ扨子を受ゝあれと風の
柳のふあうふ扨ゝのゞゞ親人切義さあふせゞれふ
五郎がいうふお世話ふまうさお方集時ふ扨のへ
移ども武士と町人へ及ゝゞ合ず一ゝ度もお逢ゝ
さぬうちふ高ゝ位ゝ明ゝ年の毒ゝ方ゝ定て

中家門の元を咎あん家を絶さまゝト人のるゆく
いのさだう却りひめ分すぢ居こふぐ近き以来ぢん
道へ引紙て来さ浪人の娶女ぢゝ後子の娘を
それ〳〵鬼人〳〵たそのうへで娶情ふ母を妻と
の風流ゝ情なきうのト尚もまきをゆくれい
切義さ母の実の娘徒ゆ〳〵吾子の為へ無理
なるものをのお塗〳〵中さ切義さ人の零ゝ落をも
般ゝのぐ何ようの若ごん切徒と性る大儀の立八



益幸髄益の伝ゝと偽うまうそう結ゝく勝手
究り五十あふ営〳〵れ〳〵も若ゝのぐ日以後毎く
孝行をゝすゝす母をを感ぐのく法ゝよ世〳〵ハ
我〳〵まゝ母ぐ母の行未後ゝとも色ちらとも
さん方後つ斗ひあうと偽のく母後ハ偽つふ亡父
世の甦飯て母を母ゝ妻ゝ後母の為ふ娶
情と無く苦累ふ沉まべそも今ハ死りのと
光情究〳〵駕の中そ引入て吾ちの


次一ヲ

山水

世情を学ぶもうまくて死美人海内山内もあるくふ
祭りなる死今年の世意想写加ふ能しくらふ
せわくくんの拙ぶ丈命の作り世傷あて世悪鈍りの
お仏方ぬと少しふさせくちさうませトいのふ芸人
いろふも芸弁のんぎぐまくさふ絵母のふい
五十ぬの今で切り我くまぬぶ娘くくく老人の
分抱を嗅むぬりの愛へ子それいまアくくあア
あり雑ふおぎうますす実の父さぬ母さぬト思うて

世側ふ希うまする世人の作十分ふおまひあれ
てちさうませ書へいあもそれいかさぐひあふ是と
いふも枝接と拙のさ輪ぬ弟ふ潮の根の笑
雑ふう猪倉の里ふ作るもいらず今ハ京の人と
ふう釈子の縁いあうあぐら書く傷る猪のそら
作りふあふねん細さ又そのうくふちらうも笑し
お徳ハ非業の宮朔宮あて拙まるハお面鍋で
容子も長細学ぶぐあらくまへハイとぐうふ云

義経のお徳さんといふは吾儕が命まかり
さぶらふ者代りの由側なる人々申すやうは
夏へ御上洛あるべしと君若の尾ぶ解う給らふ
也くの名波法皇の威光で押壁ても通あらね
るべけれども理さうあぶら差〳〵お船尾も解
わらう知る事さるハ人寄〳〵の料とやらで来た由
聞り申さ〳〵尾ひ勝わぶ命差へ知る事さる
のお命を助けずん悪のあるべ親へ云ハ法と

言語を工夫主君を歌きまるふ事ようん
有明の法皇のくれ〳〵恨ぶもれ通きるお徳
さんのお形へ通りあ知る弁さみの扱ハあんなく
見へれどもこの法のゆ〳〵さいふ言れねるの羅
義経弟なれば足姫とも法皇の威光の命さへ人
重死ぶ人の小夜衣揚を立る一下の弟ふ扱ハ
さうしん稲をいつく辞退の一生懸命ふ人を
歌く大罪人と嫌〳〵の封こ切り申へ申ふ

さうでありさうもなく死ぬる気遣のうくまれで
苦痛を堪へ難く未練もあくまで命を捨てる
も達れ貞女の殉死なるト言殿一たん元治なり
しが出る他云すぐうらずト行せあり之れ後に
風説も絶てあるうと笑がりの沿りに出来た
処へ涙を呑び工そうでありさう情なやなるに操
城立るトいへて切りと死をもして退さなア死
骸をみる時報ぜの稀実なて容子がありう



トハ切のくども泣のれぬい死人をはまへ駄あるう
がは裏で推量ーさんのうちが解ィ外まはふ泣
さ夜静サ夫トの命を頼ッさ人に貞ふをあて
報さ易ーとハ報の稀なるお徒どの安を成くい
ーく泣のーーうハ空とあもを安ーを弟ーが方ハ知せく
きり源ずがはうら一遍の阿字の子向ハ解の人の
百萬遍あも待ぐべーと輝を生品の輝ざみを
笑ハ笑ハ絡る場ーるさんべ安ハ朧安もまー

泥犂〜きりのゝ地獄の業苦ふ心まうて見ゞ
ゆゝふ死るゆも馱ず泣ゞる死るゆも強悪
て面雑るゆも嬉〜と傾ゞ善悪るゆも楽〜と
却りゝふ法ふ命をも捨身をも敗すふ〜る
るゆ此三ツの外ゆふ他佛妙海大王のゆふ十戒
戒敷〜提謂ゆ者ゆの苦ふ五戒を持ゆゆ解て
竜歌の竜蹟るゆハ一念五百生怨念無量罪
と見を戒〜ゆ法まる〜雪ふ又種連妻ハ

五明ゞ谷を逐天ゆ母〜ゆ尚ふ笑を鄭さ
ざるゆを心悔ふ却のひその行状を例ふ
源ゆ法とゆ者ゆ嘱を弟〜ゆ面業を追放
されるゆ母と仄ふ坊のゆ〜ゆ指ゆ〜ゆ者ゆ
逆を付て駆ひ今ゆ鄭すまでゆ法ゆ業と擄
掠〜吾執悪の却のひを散さざやとます〜
怨念穀魂ゆ磨〜ふ雪のゆ者鄭逆〜
恐びら〜ゆ法まるゆ笑おゞ身上を問尋ふ

夫笑の大礎の廓く身を奏して先冠を
立出て迚慥に笑のく今は却のひ出て強の法外
獣獣とまのくもと言に的べきるのに惜さふ
又一下思案て法まべくの笑が身を奏て今
仏程うの志く程ども海まるが懐中ふあるべくふを
せあく見ても奪ひうるて立去んと夜のある
戎狩寝入けるの晶を見まるて去のび入く
深まるが喉仏一下影繰奏のあるるもあらあく



爰の命と消えぬ妻門天ハ供命発よりて
懐中の金戎抗を出て拝ぶ溺思立出て行
ふもまるずゆよくうあるまもべて法まるが仏中
貪瞋癡の丙ふ命を夫ひふ笑ハ知孝乃
丙ふ危き雑を遊て命を今てまるすあ
国呆意教のやるふ生紀法物の形ハ忍ふ
るて慎むべくされべふ笑ハ虎の口竜の蹄
戎遊ふく測らざる紀去人夫仮ぶ奉性ふ

時〻安諸の月日をくり苦累不沉むものの
代りと他るまく孝歩を忘て住くるる又
逆雪が死髪の庶清せ〻老姫手〻そるの稲後
不義まくりと共〻

人情
奇縁言葉元上巻終